

山と博物館

第 3 卷

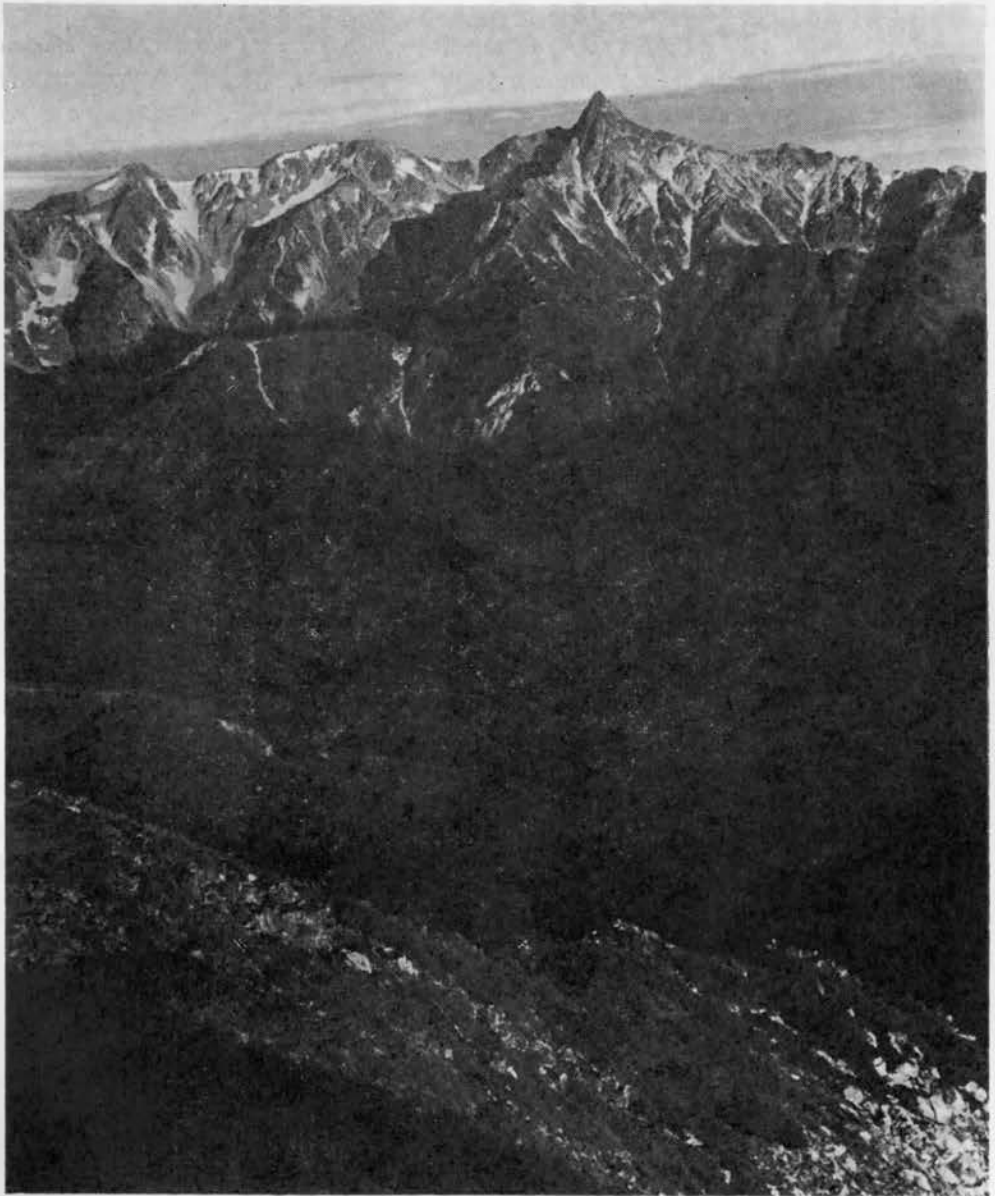
第 9 号

1958年9月20日

曉の槍ヶ岳

昭和電工大町工場

下川 近夫



夏の山は多彩である。何物かを求めての度重なる山行でもそのつと、山の姿は異って「レンズ」におさまってくれぬ。北アルプスの展望台といわれる常念岳で雲海のかなたに真紅な太陽が昇り、「バラ」色の空に輝く槍穂高連峰のす晴らしさに思わず切った「シャッター」だったが、大自然の美の前には文句なく庄倒されてしまう。やはり眼底に焼付いた写真にはとうていおよばない瞬間の美をつくる。雄大な山容は、私の腕にはどうしようもない

白馬岳8月中旬の植物【上】

大町山岳博物館学芸委員 寺島虎男

本夏8月初めて行われた千葉生物会と信濃生物会、大町山岳博物館との交歓会に引続き11~12の2日間は日本アルプスを代表する白馬岳(2933m)に登高、自然教室としての高山の動植物の観察を合同で行い多大の成果を収め得たことは誠に結構な事であった。これを契機として山に海にと自然探究の端緒を開き、今後この行事が継続進展されてゆくことは相互のためいかに有意義なことかと考えて期待され、快心事である。

さて今回の調査により、この時節すなわち8月10日前後の期間に白馬岳の山麓から頂上に到る間いかなる植物(主として草本)がいかなる所に開花しているかを列筆して解説を試みようと思う。

① 四谷より猿倉に到る車中で見られた植物

△オオウバユリ(丈平均150cm内外、径1.0~1.5cm位、雄大な茎上に横向のユリ科のしくみをもつ緑白花、花数の多きもの13-4、鱗茎も大)

△オオイタドリ(丈平均1.6m、径1.5cm内外、葉がイタドリと異り葉底が心臟形である)・タニウツギ(木、紅花、多産)・ノリウツギ(木、白花)・ハンゴンソウ(きく科、黄花)

② 猿倉より白馬尻まで

◎オオレイジンソウ(トリカブトの葉に似て茎弱性直立、黄花、レイジンソウは淡紅、紫花)・サンカヨウ(めき科、白花)・ツマトリソウ(さくらそう科、白花)・クロトウヒレン(きく科、淡紫花)

△キヌガサソウの小群落(えんれいそう科、葉輪生、7~8弁、白色花)・イワオトギリ(おとぎりそう科、黄花)・ジャコウソウ(ごまのはぐさ科、淡紅花)・メタカラコウ(きく科、黄花)オニシモツケ(群落、白花、ばら科)・オオカニコウモリ(きく科、茎は屈曲性あり紫質、白花)・イワカガミ(淡紅花)・タマガワホトトギス(しゅろうそう科、淡黄花)・キオン(きく科、黄花)△ミヤマシシウド(丈1.5m、繖形白花、大型)

③ 大雪溪

△オオサクラソウ(さくらそう科、三号雪溪の向側傾斜草地に点在、濃紅紫花)

トワダカワゲラを発見す。ニツコウキスゲ(ゆり科、一名ゼンテイカ、黄赤花)

④ 葱平附近(お花畑)

・ヤマトリカブト(紫花)△ソバトリカブト(ヤマトリカブトより更に葉深裂)・オオヨモギ(きく科、一名ヤマヨモギ、淡黄花)・イワオオギ(まめ科、帯黄

白花)・コミヤマカタバミ(かたばみ科、白花)・イワノガリヤス(いね科、葉粉白色、葉縁ザラザラする)・テングクワガタ(ごまのはぐさ科、地をはい、淡青花)・ミヤマタンポポ(黄色花、総苞片の先に角状突起)・シナノオトギリ(おとぎりそう科、黄花葉には黒点の外に明点あり)・ユメススキ(いね科、穂は紫褐色)・クロクモソウ(ゆきのした科、暗紫褐)・タカネヨモギ(きく科、三回羽状深裂、陽地性)

△シロウマアサツキ(*Allium Maximowiczii* Regel)ネギ科、淡紅紫花、葱平はこの種植物の群生人目を引くところから、今個体数は少くなっている)・ヨツバシオガマ(紅色)ミヤマシオガマ(葉は根もとより6~7葉叢生、紅紫花)・イブキゼリ(白花)・シラネニンジン(一名チシマニンジン、白花)・キレハクンボウフウ(白花)・イワツメクサ(なでしこ科、白花)・ミヤマセンキウ(丈50cm内外、白花)・アラシグサ(ゆきのした科、淡黄緑)

◎テンニンソウ(群生、ごまのはぐさ科、黄花、未つぼみ北方系)・シヤマカラマツ(白花)・ミヤマアワガエリ(いね科、多数の小穂の密集した円柱状の穂、緑或は帯紫色)△オノエリンドウ(*Gentiana Takedai* Kitag. 草体瘦型、枝無し、草間は隔大、花碧色)・ツルリンドウ(淡紫花)・ハクサンフウロ(濃紅紫色)◎ミヤマアキノキリンソウ(きく科、下部葉は葉身の基が柄につまき上部葉は殆んど無柄、花アキノキリンソウよりやや大形、葉質も厚い)・ニッコウキスゲ(ゆり科、黄褐花、群落性、一名ゼンテイカ)・ミソガワソウ(しそ科、水辺湿地を好み、群生、碧紫花)・ミヤママイ(イ科、群落)

⑤ 小雪溪より村営小屋下までのお花畑

・ハクサンイチゲ(白花)・タカネダイモンジソウ(ゆきのした科、白花)・ミヤマガラシ(あぶらな科、黄花)・ミヤマアブラスキ(カヤツリグサ科)・ミヤマバイケイソウ(白花)・クルマユリ(葉輪生、紅赤花)◎ホソバミミナグサ(なでしこ科、葉の間隔は大、細葉)・タカネヤハズハハコ(きく科、一名タカネウスユキソウ、純白花中に多少帯紅花を混生)◎タカネナデシコ(紅色、苞の先端、花小さく、弁片の切こみが浅く髪毛の少ないことでカワラナデシコと区別される)◎ウサギギク(群落)◎ミネウスユキソウ(きく科、シロウマウスユキソウと呼んだ種、低山産、ウスユキソウの高山型)・ハゴロモグサ(白馬岳のほかは八ヶ岳、白峰三山に産す。(続く))



四季とリシリ

【1】

ヤマネ *Glirulus japonicus* (Schinz)

かわいらしい珍獣

○…博物館には時々変わったものや、もの珍らしいものが発見されると大騒ぎで持ち込まれる。そして、面白いことに動物などは毎年同じ時期になると同じようなものが必ず持ち込まれる。そのために我々は現物を見る前に話を聞くとおおよその見当がつく。水田の稲穂が黄色味かかってくると「サギのような頭の長い褐色の鳥……」

「ははあ……ゴイサギだな」というようなわけである。○…ところでヤマネも毎年4月頃には必ず一度は持ち込まれる小動物の一つである。「木を切り倒した根元からリスのようなネズミがとび出したので捕えた。何というものか教えてくれ」。とかひどいものになると「背中にしまのある珍らしいネズミをとったから買ってくれないか」などいって持ってくる。ちょうどこの頃のヤマネは冬眠からさめたばかりで動作がにぶく、気温でも下ってくると、再びまるまって死んだように眠ってしまう。

○…ヤマネは齧歯目(げっしむく)ヤマネ科に属する物で、大きく見るとネズミやリスの仲間であるから、持ち込む人々の考えも当らずとも違わずといえるところ。たしかに世界的にも珍らしい小型哺乳類で日本では1属でただ1種、しかも本州、四国、九州の三つの島だけに住む珍獣である。北アルプスでは海拔800m位から上に

住んでいて、樹木の穴や小鳥の巣などを利用して巣をつくる。内部はシラカバやヒノキなどの樹皮をこまかくしたもので寝床をつくって眠っている。また山小屋の屋根裏やたきぎの中で眠っているものもある。

○…鳥帽子岳の1800m付近の雪溪の中に5cm位の穴を掘って冬眠していたものを見たことがある。よほど住宅難だったのだろう。この時は5月下旬であったが、すでに凍死しているものと思っ、フタの無い空カンに入れ山小屋の棚の上へおせて置いたら一夜のうちに冬眠からさめて、翌朝はいずこともなく消え去っていた。

○…例外は除いて普通北アルプスの山麓では11月下旬頃から冬眠に入る。たぶん2000m位の高山に棲むものは10月中旬頃から冬眠に入るといわれる。実験によると外界の気温が下ると一諸に体温が下り、温度0°Cで体温0.67°Cの最底になったと報告されている。

○…彼らはあたり前の状態では冬を越すことは非常に難しいことであろう。しかしこのように具合よく外界の温度と調和を保ちながら、寒くなり餌の無くなる時期になると眠ってしまうのは、ちょっと神秘的でさえある。

新雪の間近にせまった北アヤマネたち、今頃はさそかし冬眠の準備に忙しいことであろう。(平林国男)

自然保護への道

大町山岳博物館顧問 福岡孝行

「登山者は一尺の高さを争い、一步の先を競うて、白雲迷う山頂をのみ目懸けて登れど、日本アルプスの美は、森林、幽谷の間に於てもなお見ることを得へし、溪流の奇勝は山頂の展望と共に吾人の感興を惹くこと渺ならず。特に森林の露、溪流の雨に至りては詩題としてまた画題として、幾多傑作の材料となすに足る。此森林の下溪流の濤、草をしとねとし枯草を焚きて一夜を明すが如き、一万年の大古の儘なる生活は二十世紀の今日他に於て見る能はざるなり、人は欧州アルプスの奇を説き、勝を称すれども、山頂に近く登山鉄道あり、到處宏壮のホテルあり、氷雪の上には靴痕縦横せり、斯の如き俗境と日本アルプスの神聖の境とは、口を同じうして語るべからざるなり。

頃者大林区署に於ては、この谷の樹木を調査し、林道を開きて此鬱(うつ)々たる森林を伐採せんとす、明科駅には製材所を作りて、梓川の材木の製板を試みんとす。嗚呼自然は破壊せられんとす。霊境は残賊せられんとす。自然の破壊者に向つて、吾人は抗議するの権なきか。…」明治40年、志村烏嶺氏は中房温泉を起点として高瀬



明治39年8月、有明頂上よりの屏風岳(頂上尾根が今日の北アルプス銀座)初縦走、志村烏嶺写す

の谷に入り烏帽子より南走して笠ヶ嶽を経て飛驒に下る計画で入山したが人夫が病気で、やむをえず予定の変更をして烏帽子より鷲羽まで縦走し、涙をのんで高瀬の谷に下り、葛温泉を経て大町に出た。

最初に引用したのは、その時の紀行の最後の部分である昨年83才の高令を以て白馬登山をされた志村さんはこの50年の移り変りにどのような感慨を抱かれたであろう。

× × ×

いわゆる近代アルピニズムの発達の主な舞台となったスイスは、今日自他ともに許す観光国としてその美しさを誇っている。けれどもその美しさは人間の力によってつくり上げ、保たれていると言ってよい。

スイスにもかつては森林の乱伐時代があった。多くの進歩には危険がひそんでいる。強力な技術、機械をつくり上げた近代の人間は、その反面で自然を、山の自然を破壊してきた。その最も大きなものは何と言っても森林の破壊と言ってよいであろう。

スイスでも過去数百年間にわたって森林は無思慮に伐られたのであった。

森林を伐りはらうということは土地を無価値なものにしてしまうと言ってよい。森林は、その根を張って土を、そして岩を与え、水を保ち、これを徐々に流す役割をはたしている。森林は豪雨を受けとめ多くの災害を未然に防いでいる。また森林はその無数の幹や枝によって雪を与え、ナダレを防ぎ、地すべりを防ぐ、これらの危険、災害を防ぐにはたゞ造林による他はない。スイスはこのことに早く気づいたのだ。裸にされたはげ山に森林の衣を着せるために、スイスの政府は周到な計画と巨額の支出を惜しまなかった。危険が迫っている地域には強力な造林作業が行われた。スイスのアルプスの造林作業は今日では一応の目的を達成しているが、かれらは決してこれで完了したとは思っていない。作業は不断に続けられているし、またその必要を強く認めている。

スイスの国家の財産をそこなうような行為をきびしく阻止することを目的とする団体が幾つも結成されている。スイスの郷土保護協会はいたるところに支部をもっている。そしてその主要な目的はたゞ営利のみを考えて自然美を破壊するような企てを封じるにある。

例えば、マッターホルンに登山鉄道が敷設されようとしたとき、この協会の集めた反対署名は7万にのぼった。

(スイスの総人口は4,925,000人)

またこの国土保護協会は、水力発電所の建設に対してももしそれが美観をそこない、おびやかすものであれば、容赦なくレジスタンスを展開する。さらに、広告をベタベタ立てて自然の景観、または都市の美観をそこなうような場合には活発な反対運動をくりひろげる。この協会の活動は、しかし、たゞ単にこのような受動的な面のみには止まるものではない。この協会はさらに、人間のつくり上げたもの、例えば、古い重要な建造物は勿論、土地土地の風俗習慣、方言、民謡等の保存に対しても常に配慮を怠らない。植物、動物の保護は勿論であるが、その他数多くの団体が国土を保護するために緊密な協力をして郷土固有の演劇、服装、工芸等各分野の伝統維持にも努力を続けている。

スイスの自然保護協会は、青少年に対してかかる思想を深く植えつけるために、力強い指導、啓蒙運動を続けている。この成果は国立公園の成立に特にいちゞしく現れている。この国で国立公園が最初に定められたのは、1909年、約50年前のことである。

(わが国では昭和7年に国立公園法が施行され、実際に指定を完了したのは昭和11年である)

スイスの国立公園の面積はツーク州全体面積に当る。(スイスは22州よりなる)

わが国立公園の総面積は内地の面積のおよそ2.07%に該当する。

しかし、この国の自然保護と国土美化の思想の普及徹底はこの国全体を国立公園としているといえよう。オーストリアも同じである。「国立公園」はあるいは不心得者が多いことを示すものかもしれない。

国立公園という考えは、もともとアメリカ合衆国に生れたものであるが、スイスのそれは最も完全に近いものといわれ、動植物の保護は特に厳重に行われている。

豊かな植物でおおわれたその美しい自然の中には、鹿、カモシカ、雷鳥等々が何の不安もなくのびのびと生活するのだ。この公園中では、動物をとることも、魚をとることも、たとえ一輪の花を手折ることも、かたく禁ぜ



ロバの壁を行くピアトス登山鉄道

られている。

かゝる配慮の徹底によって、国立公園の中では、自然がその絶対的な権利をとりもどし本然の権利を認め、これを守るか否かは一に人間にかゝっている。破壊はたやすいが育成には長い年月と多くの労力が要るのだ。

国土の大きさから見るとスイスはわが国の1/9であり、人口からすればわが1/17で、この二つを比較することは無理かもしれない。しかし、だからといって放置しておいてよいという問題ではない。

むしろ狭い国土にひしめき合っていればこそ、益々自然を保護し、環境を美化する心がけが必要なのだ。

明治、大正、昭和の岳人展

本館では恒例の文化祭に「明治、大正、昭和の岳人展」を計画し、その準備を進めております。近代アルピニズムに貢献された人々、山岳学者、山岳研究者など山岳界で活躍された人々の各種資料を収集し、その業績をたたえるとともに、これら資料を永く展示、保存し、観覧者に便を与えるというのが目的です。内容は登山用具、装具、作品(図書、論文、原稿、写真、絵画、色紙、標本)、収集品などです。

山岳写真募集

第3巻第9号より掲載中の表紙、山岳写真を一般募集いたします。ふるってご応募下さい。

◎写真 山をテーマにして撮影したもの(たゞ未発表のもの、別に写真説明(120字)を添えること、なるべくその月々季節感をとり入れたもの)

◎大きさ キャビネ版

◎期日 毎月10日

◎送り先 大町山岳博物館「山と博物館」編集部あて

※写真掲載の可否は編集部に一任する。

信州文学碑散歩

(9)

屋代東高等学校教諭 福沢武一

桃青霊神碑 = 南安曇郡穂高町穂高神社 =

穂高神社正面の参道には樺や松の大木が並木になって、石の燈籠など立っている。社殿の方から道にこの道



をたどる。北側は商店の軒並それが県道筋まで続く。その角に奇妙な碑が目にとまる東面に桃青霊神と異様な字で大書し、左側から裏にかけて散らされた芭蕉の句も人を喰った書体。

雪散るや穂屋のすすきの刈りのこし

この碑はひょっとすると「翁墳記」有明山麓の臥明楼弘竜建てるどころの桃青霊神碑そのものかもしれない。

この秋、有明地区を探訪したことを思い返す。その土地の人は、昔穂高神社に学者がで、碑を有明から穂高へ移したと語ってくれた。その碑はこれに相違ない。とすると、「翁墳記」の碑もこれを動かさない。石はすっかり古りて、字句は肉眼では読みとれない。さて、この碑こそ凸凹のひどい自然石。それでいて表面は至極なめらか黒光りさえしている。高さ130センチ幅50センチ。

まず、雪散るやの句に紙をあてがい、目をつぶって碑面にはりつけてしまう。紙の破れること、しわのよのを見るにたえなかったから。ところが、ぬれた布をとり去って感心する。破れはせず、さしてしわもよらず、一応紙は碑にへりついていて。タンポンを打ちだす。道行く人が幾人か立ちどまって見物する気配。必ずしも好調とはいえないけれど、とにかく完結させる。

次に正面の方。——太字の輪廓がえぐられ、中央部は

盛りあげられている。やや薄い墨色がそれを髣髴させる。次は句作品と思われる右側面。それは、
穂簿に高く喜きたる大宮居

明月おどる神手洗(みたらし)の川

ひどく癖のある字をここまで判読する。がその次は手に余る。ここからすでに碑の正面にまわりこんでいる。

神遊野川始めと露おりて

苦しまぎれに一応訓んだ。ここには自分ながら自信などない。次に、碑がのっている台座の方に移る。材は花崗岩。一辺の幅2.5センチ、高さ60センチの六角柱。その正面を拓本にうつ。

願主 臥明楼弘竜 古池は垢離(くり)とる鏡初神楽
これらの字が浮いてきて驚く。なにが現れるか見当もつかないだけに、その感は深い。まず、この碑は「翁墳記」のそれであること九分通り確定する。も一つ、ここにも俳句が刻まれているとは。句意は、——古池や蛙とびこむの句、ひいては芭蕉翁の全作品は、われら俳人にとっては未熟さを洗い清める(垢離とる)ための手本である。ちょうど、初神楽の時飾る立派な鏡に物の明らかに映るように。翁の作品に向えば、われわれ自身の作品が明確に対比され、反省させられる。

六角柱の他の面には、上部に助力と横書きし、下に芳名が列記されている。たとえば、正面左隣には、一志、茂広、真光寺、花月楼、神宮寺、法久山が六行に記される。

なお、も一つ下の台石にも刻字がある。これは四角形で、花崗岩。この方が一層苔むしている。正面の一边には世話人名が列記される。まだまだ探検の余地が多々ある。

碑面右肩の年代、千時文政六つとし云々と前記穂簿にの句との中間と、その句の下に、花押の如きものが散らされている。これはどう判断すべきか?その他、まだ後考に俟つ点を残している。それはまたの機会を期して帰途につく。



秋の虫たち



八坂中学校教諭 倉田 稔

今日は朝から秋はれのよい天気ですのでカメラやノート、鉛筆、捕虫網などをもって博物館のまわりにいる秋の昆虫をたずねてみましょう。

博物館の登り口にある地面をひきずるように花をつけたハギの花には、イチモンジセセリがたたくつけられたようにバラバラと飛んできています。茶屋の前にある百日草の上ではボロボロに破れたキアゲハの雄が一匹太陽の光をあびながら静かに吸蜜しています。とそのすぐと

なりの花にミヤマアカネが一匹飛んできてとまりました。空にはアキアカネやミヤマアカネの大群が「空が狭いぞ」とばかりに飛びまわっています。飛びつかれたトンボでしょうか、まわりのススキの葉の上やサクラの木のとっぺんなどには数えきれない位とまっています。捕虫網の先にも止っています。秋の空の王者はやはりトンボですね。

かたにきて 人なつかしや赤トンボ (そう石)

歩く足もからはコオロギがはじきだされるようにとび散ります。そのあとからコオロギの10倍も大きいショウリョウバッタがキチキチとはねを鳴らしながら飛びだします。秋は何と言ってもバッタやコオロギの仲間の天国です。3m程先の草むらではキリギリスがすりき



たような声でギーチョンギーチョンとやっています。



もうキリギリスの時期ではありませんね。右手の草むらではヤブキリの仲間がリース、リースと

なっています。そっと近づくと足もとはからはクビキリバッタ(あぶらいなごともいう)がのそりのそりとにけていきます。博物館のまわりの草原はもう秋の音楽家たちで一ぱいな秋風になびくススキに送られるように太陽がアルプスへかくれてしまうと、あとはもう鳴く虫だけの世界です。

名月や くらいところは 虫の声(蕪村)

頭上に輝くはくちょう座のデネブ星をながめながら、そっと草むらに腰を下して耳をすませていると、そこそ聞きわけられない位多くの虫たちの鳴き声がきこえます。コロコロコロリーリー、エンマコオロギです。これは夜も昼も鳴いていますね。うしろでは盛んにスイーチョンスイーチョンとウマオイムシがせきたてています。ウマオイムシは家の中まで入ってきますね。

ねがいりをするぞ臨よれキリギリス(一茶)

ファイリリーリ、ファイリリーリ、クサヒバリです。リリー...リリー...ミツカドコオロギです。左手に白く波うつススキの中から



クサキリのジージーとカンタンチンチンチンという声が入りみだれて聞えてきます。こんなうるさい中でもやっぱりエンマコオロギの鳴き声が一番よく聞えてきます。

これらの虫たちは「なく」と言っても前はねの内側にいるヤスリのような鳴器を反対側の前ばねのかどですりつけて声を出しているのです。公園の外燈のまわりでは小さい蛾たちが盛んに粉をちらしています。柱にははねの大きさが10cmもあるクスサンが三匹程柱にたくようにして止っています。何だか寒い夜です。

今まで頭上に輝いていたはくちょう座のデネブ星もアルプスの上へ行っています。でもウマオイやコオロギはおかまいなしに鳴きつけています。私はそっと足音をしのばせながら虫たちのいる草原を上げました。

写真①エンマコオロギ(メス) ②ダリヤの花に止るイチモンジセリ ③ウマオイムシ④ツチバッタ ⑤スズムシ(博物館のまわりにはいない)

今年 の 夏 山

【下】

遭難

シーズン前の6月5日、豊科署は全国の大学、山岳会など300団体に遭難事故防止の要望書を送った。「細密な計画で周到な装備で、無理をしない登山をして夏山をエンジョイして下さい」といった内容。しかし意外に遭難は多かった。新聞紙上に現われた北アルプス関係(7~8月)だけでも下表の通り。他にも相当数の負傷事故があったものと思われる。

7.4	濁沢岳ガラ場付近	転落	重傷(米兵)
7.6	奥穂高岳と前穂高岳の中間 吊尾根最低あん部	転落	
7.14	濁沢岳で北穂側から登山中	転落	重傷
7.20	鷲羽岳とヲリモ岳との鞍部	疲労	死亡(2人)
7.21	野口五郎岳と鷲羽岳中間、 赤岳付近	空腹 と疲労	凍死 1名重傷
7.21	鳴沢と岩小屋沢中間、新越 乗越(信州側)	転落	死亡
7.23	前穂高岳、岳沢ヒュッテ重 太郎新道	転落	死亡
7.25	濁沢岳から上高地へ下る途中 梶尾山荘近くの丸太橋で梓川へ	転落	死亡
7.26	上高地釜トンネル付近	落石	重傷
7.28	鳴沢岳、岩小屋沢間新越乗 越で雪洞訓練中	雪穴 の下敷	重傷
8.2	前穂高岳奥明神沢右俣の西壁 ロッククライミング中	転落	重傷
8.2	奥穂高岳穂高小屋付近の雪 溪でグリセード中	岩頭打	重傷
8.3	前穂北尾根第四峰 奥又白側	落石	重傷
8.3	濁沢、槍縦走中浮石にのり	転落	重傷
8.10	濁沢の雪溪グリセード中	転落	重傷
8.11	濁沢池の平明文堂ヒュッ テと濁沢小屋の中間	落雷によ る飛石で	死亡
8.12	穂高岳岳沢小屋東側の重太郎 新道、前穂高岳へ下山中	転落	死亡
8.16	白馬岳大雪溪三号雪溪付近	落石	死亡
8.30	北穂高岳と滝谷中央りょう雨 の中ロッククライミング中	落石	死亡

以上、自分自身で遭難を引き起している場合が多く、悪天候を承知で行動している。充分な知識と判断力が必要であろう。また非常識な行動は他のパーティーにまで迷惑を及ぼし、大事をまき起している。今後の反省を要する問題だ。

お願い 本紙の購読ご希望の方は1カ年購読料1700円(郵送料とも)を現金書留または郵便替為、郵便切手で長野県大町市、大町山岳博物館あてご送金下さい。 大町山岳博物館

ブロンズ

今夏北アルプス、南アルプスに三つのブロンズが出来上った。ウエストンを案内して北アの山々を歩き、72年の生活を山で終った、日本アルプスの主、上条嘉門治のブロンズができ上り、6月14日のウエストン祭に披露された。これは県観光課が予算12万円を計上、松本市の彫刻家に製作を依頼したもので、ゆかりの明神池嘉門治小屋の前に碑をつくることになっている。又喜作新道で知られる小林喜作をたゞえるレリーフも穂高町観光連盟の手でつくられた。9月上旬大天井岳入口の自然石にはめこまれる。南アルプスでは、南アの長衛、といわれ、人々に愛された山案内人竹沢長衛の記念碑が全国の山岳会、地元の協力で8月上旬ででき上った。このブロンズは上伊那町美和村赤河原の自然石にとりつけられる。

観光

北アルプスの観光地争奪戦が激化し、長野、富山、新潟の三県が先を競っている。特に槍ヶ岳、穂高連峯、乗鞍岳、白馬連峯、鹿島連峯など、こゝ1、2年活性化し、お互に刺激し合って観光地の大衆化をねらっている。白馬岳のホテル建設問題など、このよい例である。さて白馬村八方尾根に東急が建設中のケーブル起工式は8月15日に行い、12月中旬完成をめざして工事を進めている一方黒部溪谷に建設中の関西電力黒四発電所のダム起工式も8月25日に黒部御前沢の現地で行われ、工事とも本格的になった。と同時に黒部ダム建設のために開かれた大町ルートによって、針ノ木岳周辺一帯、黒部溪谷の観光開発並びに自然を保護しようという運動が大町市に起っている。また安曇村では番所原一帯を総合的に観光計画をたて、集団施設、スキー場などを建設するために、その開発に着手した。

道路

上高地入り路線を環状道路にしようとして明年度県予算に計上される。すでに三郷村の手によって、大滝山への林道が開発されているが、県では大滝山から上高地までの8K間の工事をする。乗鞍岳に開設中の本県側バス道路工事は、今年も防衛庁の協力で6月下旬から行われた。だが悪天候にわざわざいされて、1、4Kのみの開設に終わった一方大町周辺では県予算500万円を支出して鹿島連峯縦走コースを改修、舟窪岳一鹿島槍ヶ岳までの間、平均1.5mの道路中になり、登山者に好評であった。(高橋)

山と博物館 第3巻第9号 1958年9月20日発行

発行所 長野県大町市TEL(大町)211

大町山岳博物館

印刷所 松本市巾上町353

信州印刷株式会社